

# 志木市・<sup>むねおか</sup>宗岡地区



志木市の中央を流れる<sup>しんがしがわ</sup>新河岸川を境に、西側が武蔵野台地、東側が荒川低地と呼ばれる沖積低地となっています。

宗岡地区は、荒川低地に位置し、<sup>あらかわ</sup>荒川と<sup>しんがしがわ</sup>新河岸川にはさまれています。今より平均気温が2℃ほど高かった約5,500年前の縄文時代は海の底になっていました。



# みづか さと 水塚の里



あらかわ しんがしがわ  
荒川と新河岸川にはさまれた宗岡地区は、川のおかげでおいしいお米ができる豊かな土地です。

反面、かつては洪水も多く、江戸時代には村全体を囲む堤防ていぼうを築き、さらに「水塚みづか」を造って洪水に備えていました。

今でも街の中に 48 基以上 (2010 年現在) の水塚があり、その田園風景は、まさに「水塚の里」とも呼べる景観となっています。





# 明治 43 年の大洪水



明治 43 年埼玉県洪水氾濫記念図（埼玉県：1910 年 9 月発行）【尾崎征男氏蔵】

今から約 100 年前の明治 43 年 (1910)、埼玉県東部と東京の大部分が水没してしまうという、かつてない規模の大洪水がありました。

宗岡地区も完全に水没し、水の高さは床上約 1.5 m を越え、人々は屋根裏によじのぼり、また、屋根を破って救出されたり、流される屋根の上から助けを呼ぶ人もあったと伝えられています。



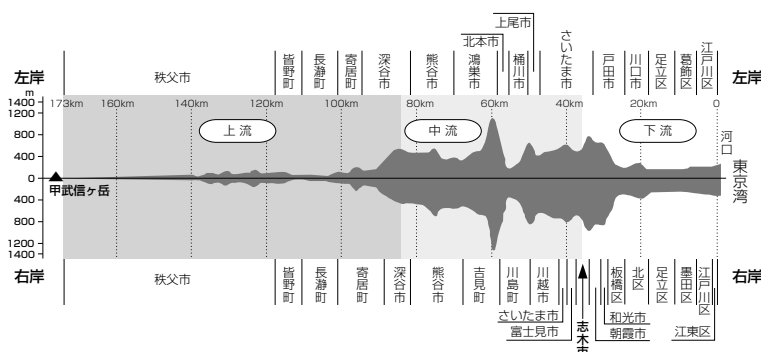
# 日本一川幅の広い荒川



明治43年の大洪水のあと、大水が川の外にあふれ出したり、下流の東京などに一気に流れこまないように工夫されました。

大水を広い<sup>かせんじき</sup>河川敷に貯めるように、荒川は日本一川幅の広い川となりました。

上の写真は、<sup>こうのす</sup>鴻巣市と<sup>よしみ</sup>吉見町にかかると<sup>おなりぼし</sup>御成橋から見た荒川です。ふだんはこんなに狭いが、台風などの大雨になると川幅が2,537 mにもなります。



鴻巣市⇔吉見町の所で最大川幅になっている（荒川上流河川事務所の資料より作成）





# 三代の堤防



新河岸川沿いに現存する、江戸・昭和・平成の「三代の堤防」(google マップより)

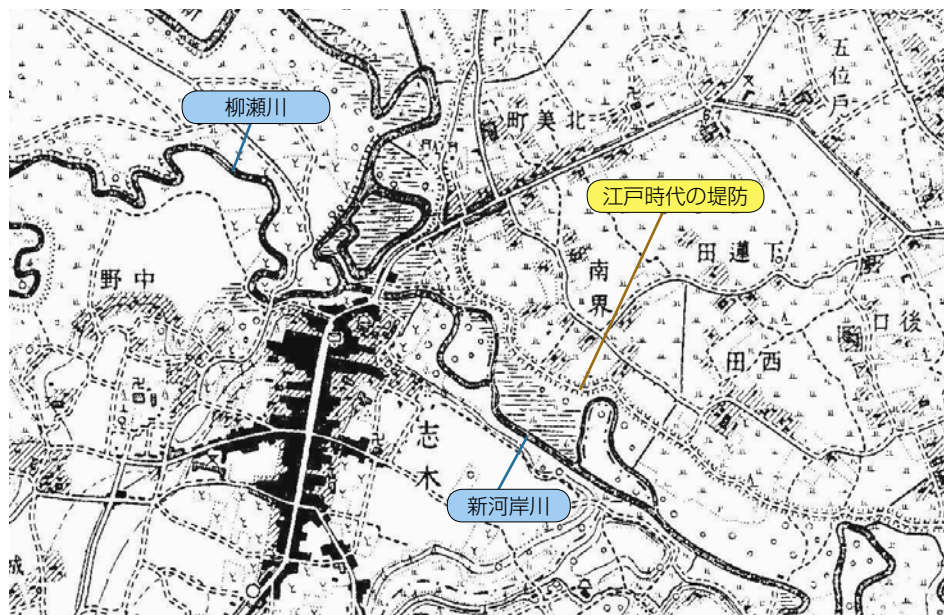
志木市内には、江戸・昭和・平成とそれぞれの時代に築かれた三代の堤防が残っています。それは、志木市役所のすぐ近く、いろは橋下流の新河岸川左岸にあります。

新しい堤防が出来ると古い堤防は壊す場合がほとんどのため、こうした三時代の堤防が並行して残っている例は本当に希です。またこれらは、それぞれの堤防が築かれた時代の治水の考え方をよく反映している点でも貴重な存在です。



# 江戸時代の堤防

## そうかこいつつみ 〈惣囲堤〉



明治39（1906）年（大日本帝国陸地測量部測量図より）  
江戸時代に築かれた堤防と、当時の「新河岸川」と「柳瀬川」が蛇行しているのがよく分かります。

宗岡には江戸時代に造られた「惣囲堤」と呼ぶ堤防が現存しています。

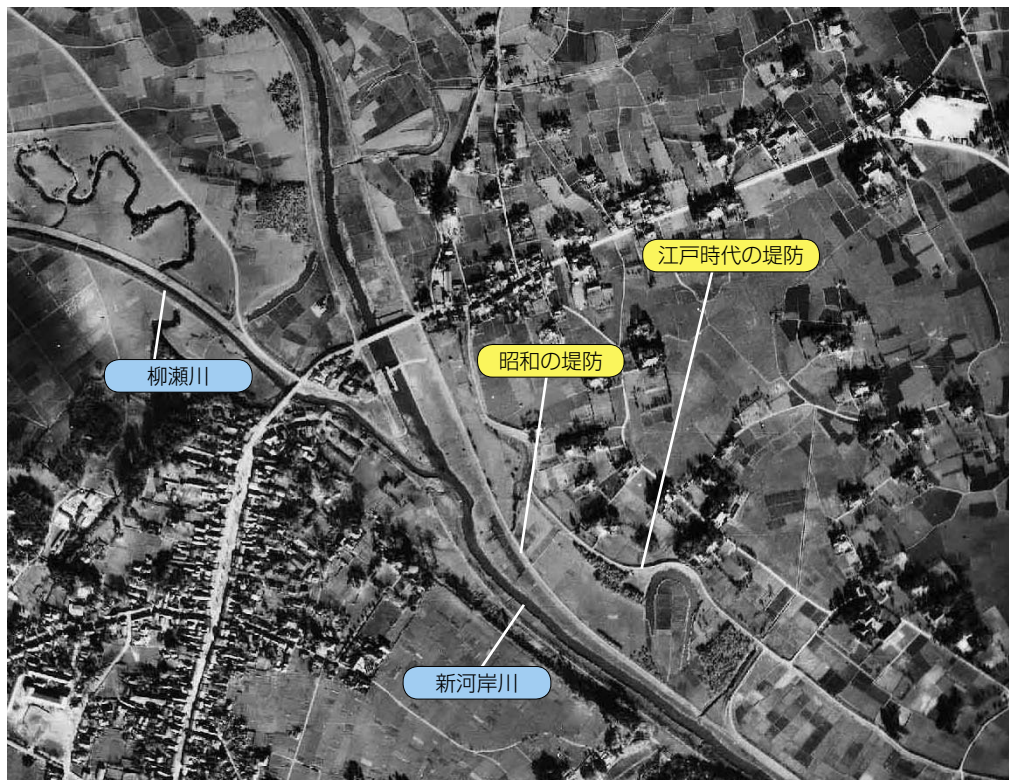
荒川の洪水は「エグミ」と呼ばれる肥えた土を上流から運んでくれました。また、当時盛んだった舟運のためには十分な水量確保が必要でした。

そのような川の恵みを活かすために、川は自由に流れさせ、その洪水流から村を守るために村全体を堤防で囲む。それが江戸時代に築かれた惣囲堤です。この形式の堤防は輪中堤とも言います。





# 昭和時代の堤防



昭和 22 (1947) 年 11 月 (国土地理院ホームページより)

江戸時代の堤防・昭和 5 年完成の堤防、直線化された川と、柳瀬川の蛇行した旧河川がよくわかります。

明治になると、低地にも多くの人々が住むようになり、一時的にせよ水に浸かるということは許されなくなってきました。特に明治 43 年の大水害をきっかけに治水対策の大転換が図られていきます。

洪水流をいち早く海まで流すために、蛇行していた川を直線化し、真っ直ぐになった川に沿って連続した堤防が造られるようになりました。

蛇行していた新河岸川も直線化され、その堤防も昭和 5 年 (1930) に完成しました。



# 平成時代の堤防



昭和の堤防と、平成10年ころ完成した平成の堤防

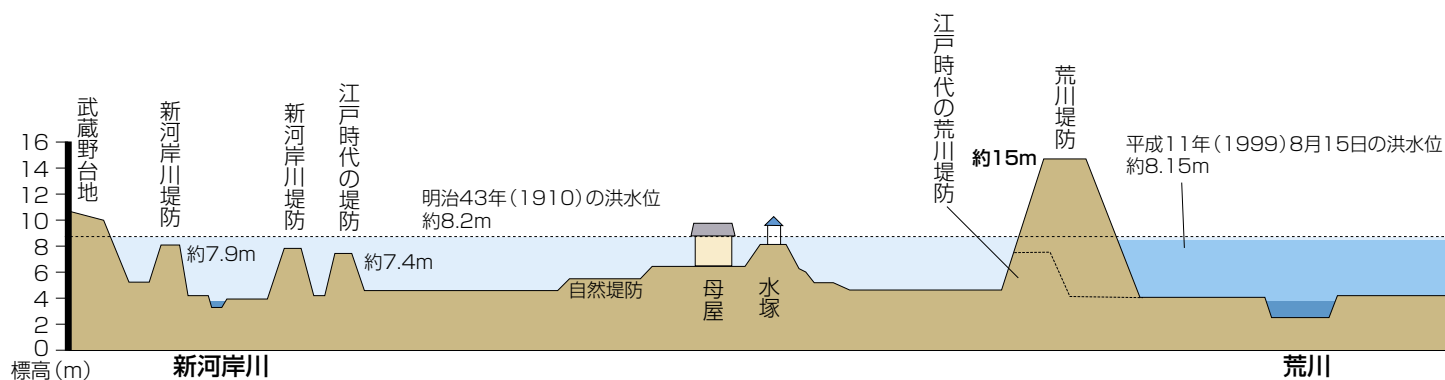
高度成長時代の宅地造成やアスファルト道路の増加、緑地や農地の減少などにより、流域の保水・遊水機能が低下し、降った雨が大量にそして急激に川へ流出するようになり、昭和時代の堤防では耐えられなくなってきました。

そこで洪水流を流域全体で抑制しようという総合治水対策がとられるようになり、遊水施設を造ったり、河川敷を広くとり、より高い堤防を築くようになりました。





# 現代の治水（堤防の高さ）



現在は、総合治水対策として、遊水施設や貯留・排水施設などさまざまな具体策がとられ、荒川から洪水があふれる心配はほとんどなくなりました。

ここでは最も分かりやすい例として堤防の高さを図に示しました。

これによると、明治43年クラスの洪水ではびくともしない、荒川からの洪水流に対しての徹底した対策ぶりが分かります。

# ひもん 現在も残る樋門



**北美塚樋**（きたみいりひ）明治32年（1899）竣工  
 〈中宗岡1丁目、宗岡第四小学校入口の新河岸川除堤〉

川の堤防には、所々に水路が貫通しています。普段は開放されており川が増水したときには扉を閉めて逆流を防ぎます。これらを樋門と呼んでいます。

宗岡村の惣囲堤にも、樋門が設けられており、もとは木造でしたが、明治時代中頃に新河岸川堤の5か所が石造やレンガ造に改築され、その内4か所が現存しています。

籠鴛門樋・大小合併門樋・北美塚樋は土木学会の「日本の近代土木遺産」に選ばれています。







## 籠鳶門樋 (かごしまもんぴ)

竣工：明治 28 年 (1895)

構造：石造

所在：下宗岡 4 丁目、宗岡第二中学校前の新田場堤



## 大小合併門樋 (だいしょうがっぺいもんぴ)

竣工：明治 31 年 (1898)

構造：レンガ造

所在：上宗岡 5 丁目、総合福祉センター裏の新河岸川除堤



## 新田塚樋 (しんでんいりひ)

竣工：明治 33 年 (1900)

構造：レンガ造

所在：下宗岡 4 丁目、籠鳶門樋の東 300m の新田場堤



# みづか 水塚の調査をしました



水塚の前で所有者の方と記念撮影

みなさんは、志木市宗岡地区に 48 基もの水塚があることをご存じでしたか？

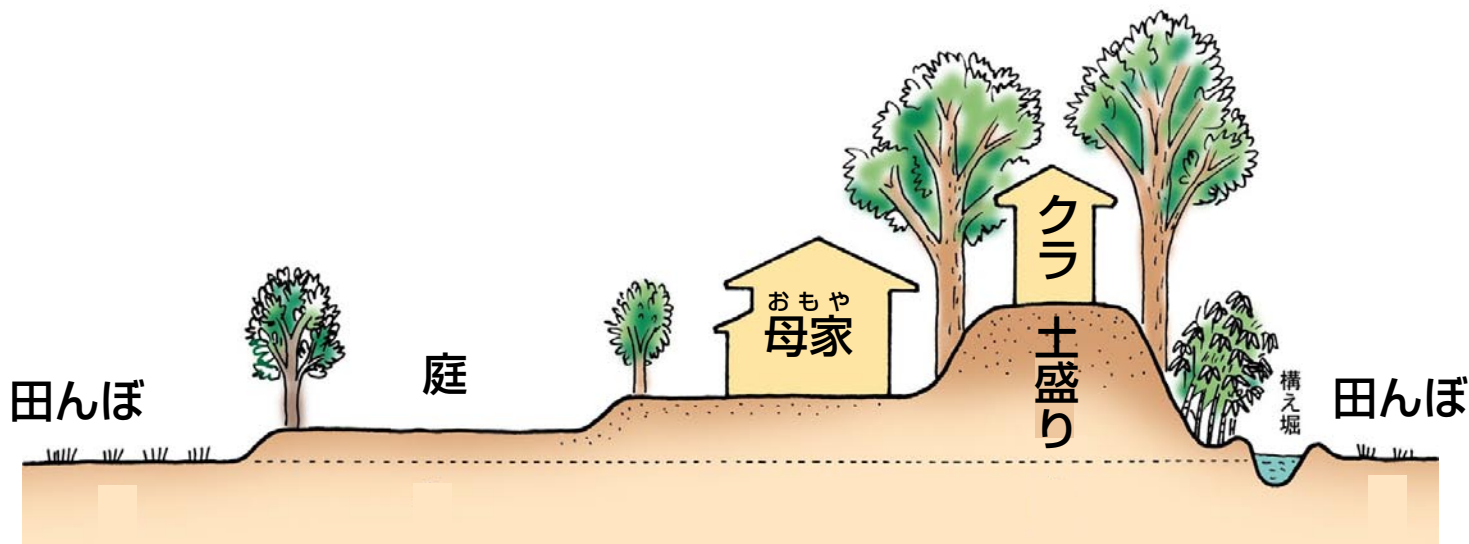
2009 年から 10 年にかけて、わたしたちは宗岡の方々から水塚にまつわる言い伝えや体験などいろいろなお話をうかがいました。また、荒川沿いの他の地域の水塚についても調べました。

この調査で、水塚には、むかしからの水とのつきあい方の知恵がいっぱい詰まっていることが分かりました。水塚は宗岡の宝物だと思います。





# みづか 水塚とは？



〈水塚〉

水塚とは、洪水に備えて屋敷内の一部に土を盛って高くし、その上にクラ（蔵・倉）を建てたものです。

クラの1階には米・味噌・醤油などをしまい、2階には布団やお膳などもあり、水が引くまでしばらく生活できるようになっていました。

水塚があるおかげで、人々は大水が出たらなにをすればいいのかがすぐに分かります。また、いつも大水への備えを忘れず、普段の暮らしは落ち着いておくことができました。



# ていぼう みづか 江戸時代の堤防と水塚

〈上宗岡 2 丁目〉



宗岡には、江戸時代に造られた村全体を囲む堤防（惣囲堤）が今でも道路などとして残っています。写真は、その堤防のすぐ脇に建つ水塚です。

志木市指定の文化財となっている「佃堤<sup>つくだづつみ</sup>」は、当時すでに造られていた水塚をつないで築かれたのではないかとされています。





# みづか 大洪水と水塚

〈高野家・上宗岡3丁目〉



高野家の水塚にある今の蔵<sup>くら</sup>は大正13年(1924)に建てられ、4～5年前に改修されています。

明治43年(1910)の大洪水のときには水塚の床上6尺(約1.8m)まで水がきて、大応寺(現在の富士見市水子)に舟で避難したそうです。



# 蔵の2階から舟で避難

〈細田家・中宗岡3丁目〉



明治年間に建てられ、昭和30年(1955)に改修。農作業が暇な時期になると田んぼから泥を運んで土盛りを補強していたそうです。明治43年の大水害の時は蔵の2階から舟で避難しました。





# みづか 明治 28 年築の水塚

〈大熊家・中宗岡3丁目〉



土盛りの高さは屋敷地より約 1.5m。蔵の礎石に明治 28 年 (1895) 築という銘が残っています。約 45 年前に屋根を、10 年前に外壁を修理しています。

「当時の外壁には、明治 43 年 (1910) の大洪水の水の跡が、下から 1.2m くらいのところに残っていた」  
そうです。



# ふね 避難用の舟

〈大熊浩家・中宗岡3丁目〉



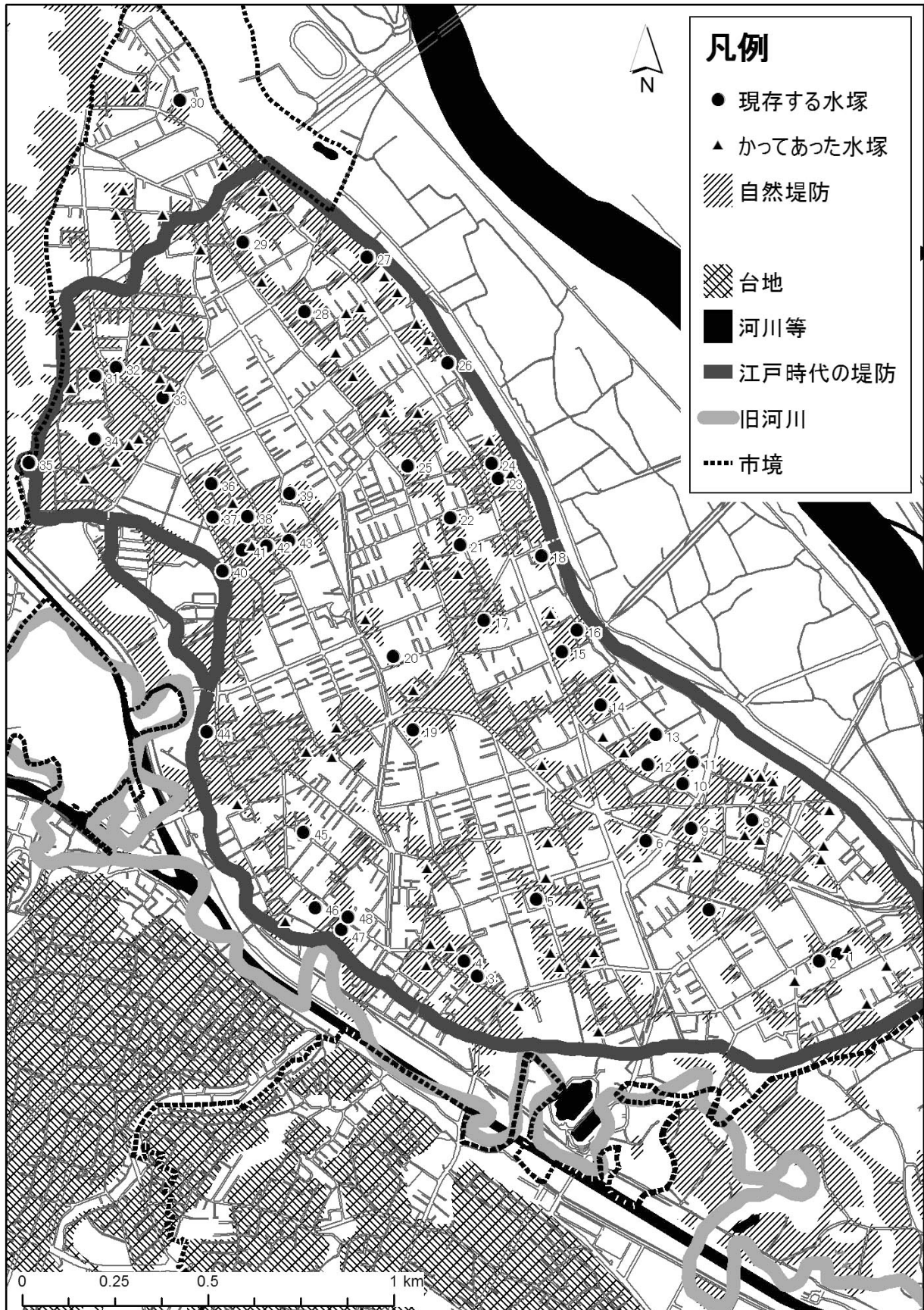
宗岡の旧家の多くは、洪水にそなえて水塚を造るとともに、避難用の舟を持っていました。

大熊家の舟は全長 4.65m、幅 1.38m。舟底を上にして納屋の天井からつって、今も大事に保管してありました。このような舟が宗岡には 15 艘（2010年現在）残っています。





# 現在の水塚の分布



基図：国土基盤地図 1/2500 より（2010年現在）





ふじみ なんばた みづか  
**富士見市南畑の水塚**



荒川と新河岸川にはさまれ、宗岡とほぼ同じ地形の南畑地区でも多くの農家が水塚を築いていました。

あさか うちまぎ  
**朝霞市内間木の水塚**



かつて荒川の堤防が無かったこの地域では、敷地全体を高くし、その上に母屋や蔵おもやくらを建てて洪水に備えていました。

ひき かわじままち  
**比企郡川島町の水塚**



入間川と荒川に囲まれた川島町。現在も田園風景が広がり、水塚がある家が多く残っています。

